



科学技術のガバナンス論とリスク問題

小林, 傳司

(Citation)

倫理創成講座ニューズレター, 4:34-39

(Issue Date)

2006-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001725>





科学技術のガバナンス論とリスク問題

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター副センター長（教授） 小 林 傳 司

1. はじめに：問題意識

われわれの現在及び将来の生活に影響を与える問題群という意味で、科学技術は年金問題と同じ。年金問題に関しては、社会的、政治的討議が存在し、国会で決着。国会議員は選挙で選出。では、科学技術については？

2. ガバナンス論

ガバナンス論の流行

コーポレート・ガバナンス／パブリック・ガバナンス／IT ガバナンス／クリニカル・ガバナンス

JICA

「最も一般的なガバナンスの説明としてよく用いられるのは、92年に世界銀行が発表した「ガバナンスと開発」における定義である。その中では、ガバナンスの3つの重要な側面として、(1)政治体制（複数政党制、三権分立など）、(2)ある国の経済的・社会的資源の活用に関する権力の行使のあり方、(3)政策の立案・実施や行政運営能力を挙げている。世界銀行の援助では、定款により政治体制については関わらないとして、(2)と(3)を取り扱うとした。

(2)を言い換えれば、1つの国において、公的な資源の使い方や管理の仕方をどのように決めるのかといったその意思決定や実行のプロセスにかかわる政治権力関係を指している。(3)は、公的部門の政策を効率的にまた説明責任を果たしつつ企画し、実行する能力のことである。

よく言われるように、ガバナンスの最たる問題は汚職・腐敗かもしれないが、経済開発協力機構の援助開発委員会（DAC）でも支持された上記の3つの側面からなる定義によれば、政治的な制度の構築と、公的部門、民間部門、市民社会をまたがる権力関係と、その関係をマネジメントする能力のこととなる。

では、何がめざすべき「グッド・ガバナンス」であろうか。一般に欧米ドナー主導でなされてきた議論では、参加、民主主義、人権、経済自由化などに一定の価値観をおいており、支援するメニューも、市民社会の育成、政党や選挙制度の整備、法の支配の強化、公的部門の透明性・説明責任の強化、地方分権などが挙げられる。」

http://www.jica.go.jp/jicapark/frontier/0305/02_c.html

『パブリック・ガバナンス』宮川公男、山本清 編著 日本経済評論社 刊（NIRA チャレンジ・ブックス）平成14年2月

ガバナンスとは人間のつくる組織体がコントロールされる様式のこと、政府・公共部門についてはパブリック・ガバナンスと称し、現在わが国において関心が高まっている。その背景には政府・公共部門のパフォーマンスについての期待と現実との間のギャップがあり、そしてそれが政治不信の拡大と財政赤字の急増という2つの現象となっていることが指摘されている。これには政府が自らの行動をうまく律しきれていない面と、国民が政府の行動を適切に誘導・監視できていないという二つの意味で問題がある。また、この改革と同時にアカウンタビリティ（説明責任）の確保も重要な問題になる。

→「政府・公共部門」を「科学技術・行政部門」に置き換えると

国民の期待／現実、信頼の低下、科学技術・行政の自己管理、国民の誘導・監視

3. 科学技術の社会的位置の変容

社会の科学技術化

利便性の提供→豊かさの実現、先進国の条件としての科学技術（科学技術の体制構築的性格
⇔体制超越的性格）、意思決定の正統性を科学技術（専門家）に依存

科学技術の社会化

社会からの資源調達による巨大化、膨大な業績の出現と俯瞰的把握の不可能性、結論の暫定性
と意思決定における正統性提供機能の矛盾

90年代を中心とした、科学技術絡みの事件・事故の頻発

薬害エイズ事件（1980's から1990's）、阪神大震災（1995）、オウム真理教事件（1995）、新幹
線トンネル崩落（1999-2000）、もんじゅ事故（1995）、JCO 事故（1999）、東京電力修繕記録改
竄（2002発覚）、脳死臨調（1992）、遺伝子組換え農作物（1990's）、クローン技術（1997）、ES
細胞（1990's）、O-157事件（1996）、BSE（2001）、アスベスト問題（2005）

「社会の中の科学技術」という問題系

4. 科学技術と民主主義の相性の悪さ

「それは民主主義的だから良くない」と言える文脈は？

「民主主義」に潜む緊張

全員参加による統治⇔優れた人による統治、妥協としての代表制民主主義

「科学の共和国」（Polanyi）

科学的見解は誰か一人のひとの心に懷かれた見解ではなく、ひじょうに沢山の断片に分裂して
はいるものの多くの個人によって懷かれている見解である。これら個人の各々は間接的に他の人
の見解を裏書するが、それは一連の重なり合う隣接領域を通して、自分を他のすべてのひとたち
に繋ぎ合わせる同意の連鎖に各個人が依拠することによってである。

特別の資格を備えた（少数の）人間（「より優れた人々」）による「知識」の正統化機能

5. 「社会の中の科学技術」に対する「トランスサイエンスの共和国」の必要性

「トランスサイエンス」(A. Weinberg, 1972)

「科学に問うことはできても、科学には答えられないが」、しかし「社会的に意思決定する必要がある」問題群の増殖

「固い科学観」からの脱却の必要性

科学は「いつでも」、「厳密な」解を出せる。科学＝審判モデル

円卓会議の思想 (U. Beck)

・専門的知識の独占排除、参加者ベースの拡大、意思決定の創出、開放性の原則

6. アメリカにおけるリスク論の反省

リスク・アナリシス (リスク評価／リスク管理／リスクコミュニケーション)

伝統的発想 (『連邦政府におけるリスク評価』NRC, 1983)

リスク評価：科学的過程、リスク管理：政治的過程、リスクコミュニケーション：メッセージの伝達あるいは専門家・行政官の間のコミュニケーション

アメリカのリスク論の歴史的段階 (B. Fischhoff 1995, W. Leiss 1996)

第1 フェーズ：(1975-84)

第一段階：数値を把握すればよい

第二段階：数値を市民に知らせればよい

第2 フェーズ：(1985-94)

第三段階：数値の意味を知らせればよい

第四段階：類似のリスクをこれまで受け入れてきたことを知らせればよい

第五段階：「得な取引」であることを伝えればよい

第六段階：丁寧に対応すればよい

第3 フェーズ：(1995-)

第七段階：パートナーとして扱わねばならない

基本的方向：啓蒙から「参加」へ

複雑で複合的なリスク問題への対処⇔個別対応規制、過去の失敗の原因は、リスク・アナリシ

スにおける上流インプットの欠如、不確実性と資源の制約

7. システミック・リスクの問題

「システミック・リスク」(OECD, 2003)

「人間の健康や環境へのリスクが社会的、経済的なリスクというより大きな文脈に埋め込まれているという認識」、「リスク分析とリスクマネジメントが政治的論争に絡めとられるという事態が進行しており、現代技術のリスクに対する新たな見方と定義が必要になっている」(O. Renn & A. Klinke)、「システミック・リスクに対処するために、伝統的な「損害の程度」と「その生起確率」の他にどのような自然的、社会的カテゴリーが考慮されるべきか」

リスク基準

- ①損害の程度⇒死亡や傷害、物品の損害など自然的単位で計量可能な負の影響
- ②生起確率⇒相対頻度での見積もり

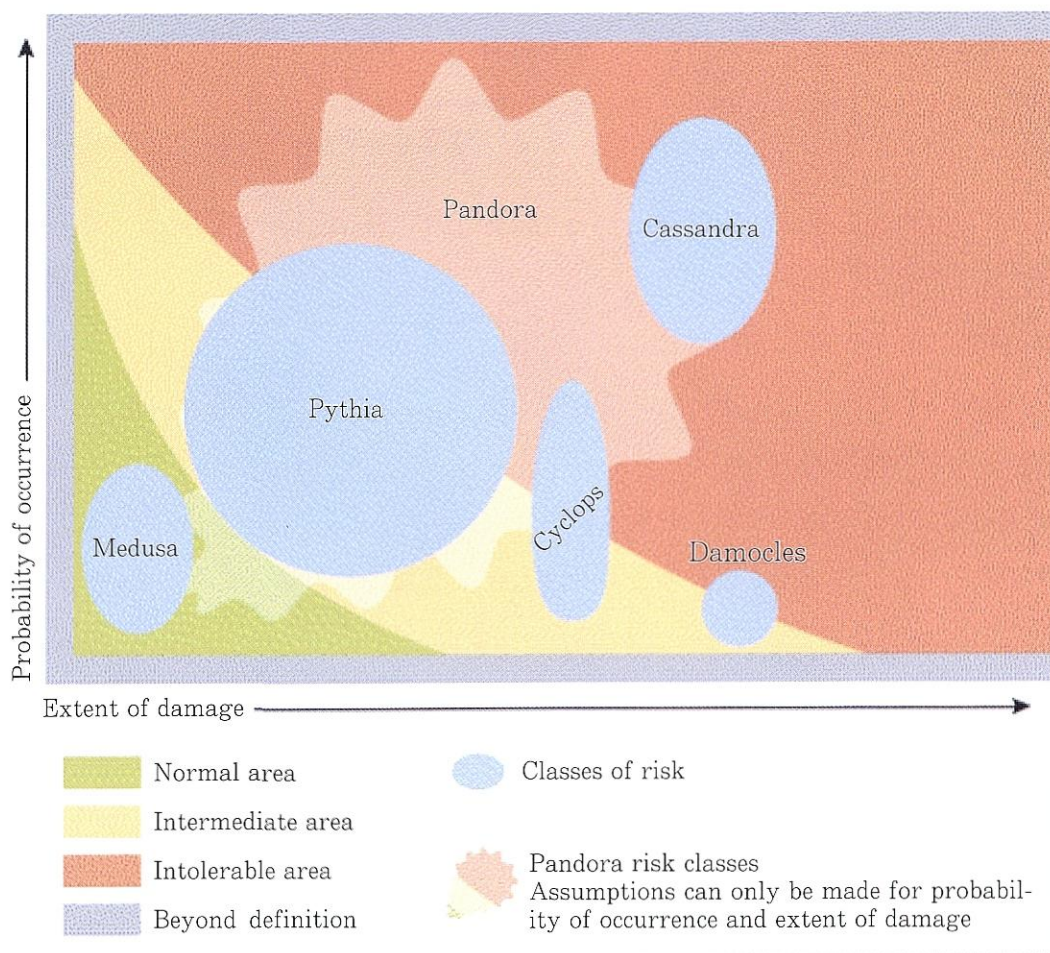


Fig.1 Risk classes (WBGU, 2000)

③不確実性 (Incertitude)

⇒さまざまな不確実性 (uncertainty) 要素の総括的指標

④遍 在⇒潜在的損害の地理的分布

⑤持 続 性⇒潜在的被害の時間的広がり

⑥可 逆 性⇒損害の生じる以前の状態への復旧可能性

⑦遅 延 効 果⇒起因事象と損害の出現の間の潜伏時間

⑧平等性の侵犯⇒利益の享受者とリスクの担い手の不一致

⑨社会的動揺の可能性

⇒個人や、社会、文化の利害や価値の侵犯により、社会的紛争やその結果に苦しめられたと感じる個人や集団の心理的反応を生み出す可能性。これはまた、リスクとベネフィットの分配の不平等性や不公正さの知覚によっても生み出される。

リスクの分類

ダモクレス型、キュークロープス型、ピューティア型、パンドラ型、カッサンドラ型、メデューサ型

参考文献

- ・ Polanyi, Michael "The Republic of Science" *Minerva*, I, Autumn (1962), (邦訳「科学の共和国」佐野安仁・澤田允夫・吉田謙二監訳『知と存在』(1985) 晃洋書房、所収)
- ・ 小林傳司 (2004) 『誰が科学技術について考えるのか』名古屋大学出版会
- ・ 小林傳司 (2002) 「科学技術の公共性の回復を求めて」、佐々木、金 (2002) 『21世紀公共哲学の地平』公共哲学10巻、東大出版会所収。
- ・ 小林傳司編 『公共のための科学技術』玉川大学出版部、2002年
- ・ Renn, Ortwin & Klinke, Andreas (2004) "Systemic risks: a new challenge for risk management." *EMBO reports* Vol. 5.
- ・ OECD (2003) *Emerging Systemic Risk. Final Report to the OECD Future Project.*
- ・ Weinberg, Alvin M. (1972), "Science and Trans-Science". *Minerva* vol. 10. no. 2.
- ・ Fischhoff, B. "Risk Perception and Communication Unplugged: Twenty Years of Process." *Risk Analysis*, Vol. 15, No. 2, 1995.
- ・ Leiss, W. "Three Phases in the Evolution of Risk Communication Practice." *The Annals of the American Academy*, 545, May 1996.
- ・ ベック 「政治の再創造：再帰的近代化理論に向けて」、ベック、ギデンズ、ラッシュ『再帰的近代化』而立書房1997年 (原著は1994年)
- ・ ベック (1998) 『危険社会』(東廉、伊藤美登里訳) 法政大学出版局
- ・ 『思想』No. 973, 2005年5月号、岩波書店「科学技術と民主主義」特集

